

愛の星

2019・第2号(通算160号) 2020年1月17日



社会福祉法人 東京聖ビンセンシオ・ア・パウロ会

愛星保育園

〒108-0074 港区高輪1-27-40

TEL. 03-3441-5410

FAX. 03-3441-5436

E-mail aiseihoikuen@fancy.ocn.ne.jp

<http://www.aisei-hoikuen.com>



園の花(すみれ)

絵本の「絵」を読む

法人理事長 鍛冶 智也

みなさんは絵本の”絵”をどれだけ丁寧に”読んで”いらっしゃるでしょうか？言葉で記されている文章のみを理解して、絵本を「読んだ」と満足していませんか？もとより絵本は、絵画と文字で物語られています。読み聞かせでは、読み手の大人は、忘れがちですが、大人が文字を追っている最中に、字は見ずに子どもたちは絵を”読んで”います。大人が文字の展開に集中している間に、丹念にページ内で描かれている詳細を読み込んでいます。映画にたとえると、洋画を観るときに字幕を読むことに集中して、本来の画面を良く鑑賞できていない場合と、ネイティブが画面だけを観て楽しむ場合があるように、子どもは絵本を読むのに、「字幕」には頼っていないのです。子どもは絵本には”ネイティブ・センス”があるのです。

子どもは、目からは線や色彩により、耳からは聴き語られた現在進行のストーリーにより、ものがたりの渦中に溶け込んでいるのです。保育園や読み聞かせの会場では、絵を読み取ることのできる環境は必ずしも最適ではなく、「語り」によって補われる場合が多いと思いますが、ご家庭での読み聞かせのように、親と子だけで成立しているような状況では、子どもは絵画の中に入り込んで、時に、ものがたりの主人公になっていたりします。何回も読み親しんでいる絵本の場合などでは、大人が読み違いをしてしまうと、登場しているいつものシーンや風景が変わってしまうので、子どもはすぐに指摘します。こうしたことを経験した方も多いと思います。子どもは、ものがたりの「ト書きやセリフ」を丸暗記しているというよりは、絵と聴き言葉をセットで、全身で記憶しているわけです。

絵本にはおよそ2種類あると思われます。物語に相対的に重きを置いている形態のもので、絵本の定期刊行物では福音館書店の『こどものとも』の多くがこれにあたるでしょう。文章にしばしば挿入される挿絵のある本は、絵は言葉を補足する役割を果たしていて、大人向けでもこうした特徴をもっていると思います。もう一方は、絵に比較的重点を置いている様式のもので、絵本の定期刊行物としては至光社の『こどものせかい』が強調していると思います。絵が展開している世界を言葉が邪魔しないように添えるのですが、江戸時代に流通した浮世絵は、絵に最小限の文章が付され、強烈な印象を人々に伝えることに成功し、版画であるため安価なことも手伝って広く普及しました。前者が「理性で思い巡らす」絵本だとしたら、後者は「感性で感じる」絵本と言えるでしょう。

愛星で四半世紀以上もの間、園内で読み継がれ、みなさんに配本している『こどものせかい』は、前述のように「言葉」以外の部分で絵本を読み解く必要となる絵本です。配本を開始した1992年は、日本で本格的に配本をし始める8年前であり、英国のバーミンガムで世界最初に子育て家庭に絵本を配る「ブック・スタート」開始と時期を同じくしています。配本当初は、試行錯誤だったと思いますが、初期の高邁な理想に比して、これまで漫然と継続してきた面もあるこの活動を改めて省察する必要を感じました。アンケート等でご協力下さった方々には、深く感謝申し上げます。この成果の一部がこれに続く内容です。

絵本の読み聞かせは、親子が互いに向き合う絶好の機会であるだけでなく、絵本に時を同じくして向き合って、お互いに同じ方向をむく極めて貴重な時間でもあるのです。

保育士 長山 敦子

ここでは配本をすることで保護者の方々は家庭でどのように活用をして下さっているのか等、2018年10月に在園保護者にアンケートを取ったその結果とその後の保育者の取り組みの工夫・その効果について書かせて頂きます。

アンケート結果

・毎月「こどものせかい」に保育者 1 人の感想を別紙にして挟んでいる。「こどものせかいをよんでいるか？」の回答と比較をすると絵本より感想の方が読まれていることがわかった。(図 3) ⇒絵本を開こうと思う気持ちになる感想の工夫をすれば読んでもらえるのか？

親子で「こどものせかい」を
よんでいますか？

頻度	割合
毎日読む	76%
1～2回/月	24%
3～5回/月	0%
6回以上/月	0%
その他/月	0%

■ 読んでいる
■ 読んでいない

絵本の読み聞かせをする頻度

頻度	割合
毎日読む	36%
ほとんど毎日読む	20%
週2～3日	17%
週1日程度	15%
毎月1度	12%
1か月以上	0%

■ 毎日読む
■ ほとんど毎日読む
■ 週2～3日
■ 週1日程度
■ 毎月1度
■ 1か月以上

～保護者へのアンケート結果より～

読み聞かせて最も重視する理由

理由	割合
親子の絆が深まる	36%
子どもが絵本を好きになる	27%
子どもの感性が育つ	22%
子どもの知識が増える	15%

■ 子どもの感性が育つ
■ 子どもが絵本を好きになる
■ 親子の絆が深まる
■ 子どもの知識が増える

親子の絆が深まる
回答者

国書普及課

- ・子どもの感性が育つ
- ・子どもが本好きになる
- ・親子の絆が強まる
- ・子どもの知識が増える
- ・子どもの言葉の発達が進む
- ・子どもが成長を喜ぶ
- ・人の話を聴けるようになる
- ・絵が好きな子になる
- ・絵が嫌がりたりとした気分になれる
- ・いつまでも思い出になる
- ・親の子どもへの愛情が伝わる
- ・子どもの順応性が高くなる

～保護者へのアンケート結果より～

親子で「こどもの杜かい」をよんでいますか

76% 24%

保護者の感想は読まれている

職員が書いている感想を読んでいますか

88% 12%

■ 読んでいます
■ 読んでいません

アンケートの結果を受け、園から保護者に向けて発信が少なかったことが課題として挙げられました。多くの保護者が「読み聞かせをしたい」と思える取り組みを工夫しようと保育者間で話し合い、現在以下のように取り組んでいます。

【図4】

保護者への働きかけの工夫①

◎保護者が絵から読み取ることが出来る伝え方

- ・感想の書き方の工夫
- ・保護者の声を共有
- ・配信サービスの活用

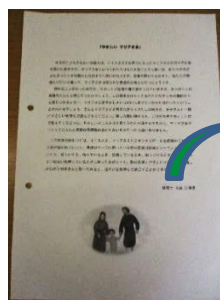


【保護者への発信方法を多様にする】

低年齢の保護者の多くは、「子どもが飽きてしまう」「今はもう少し字が少ない本を読んでいるためこどものせかいを読んでいない」などの意見が多かったため…

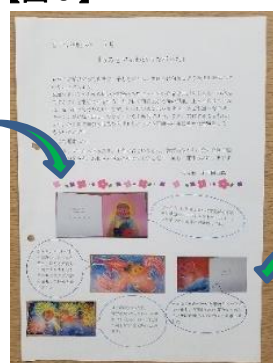
- ①保育者が子ども達に読んだ感想や保育で読んだ時の子どもの反応を書いて貼る場を玄関に設ける。（図4）
- ②絵本に挟んでいる感想に絵から読み取れる部分も書き、ページを開いてもらうための工夫をする。（図5）
- ③媒体は紙だともらった時に忙しいとその後は読まないという意見もあったので、現在園だより等を紙から変更した配信サービスを利用することで目にとまるようにする。

【図5】



以前の感想

感想を書く人、一人の
感じたことだけだった



現在の感想



保育者自身が感性を磨くためにも、全職員が
自分の感想・気づきを付箋に書いています。
抜粋して図5のように載せています。

どのようにしたら“感性が育つ”のか？を考えた時、感性が豊かな大人の関わりが大切と当園では考えます。

絵本「こどものせかい」は絵から読み取ることが出来る絵本を手掛けているからこそ、子どもが自分で読むだけでなく、読み聞かせでのやり取りから“感性を豊かに”して欲しいと思い、「こどものせかい」の配本に取り組み、園内でも読み聞かせに取り組んでいます。



保護者への働きかけの工夫②

◎実体験

- ・ 保護者会で保育者が読み聞かせ
- ・ 保育参加・参観で読み聞かせ体験
- ・ 親子参加型読み聞かせ会



読み聞かせの楽しさ・
心地よさを知る

【保護者に読み聞かせの実体験をしてもらう】

文章で知らせるだけでなく、実体験することでより読み聞かせに興味がわくのではないかと考え、保護者の多くの方に読み聞かせを聞く側、する側を体験してもらっています。



保護者会で聞く側を経験



← 保育参加で子ども達に読み聞かせをして頂きました！

2019 年度前半から上記のような取り組みを始め、約半年経った 2019 年 10 月に意識の変化を確認するため再度アンケートにご協力を頂きました。回答して下さいました方の半数以上の方が新たな取り組みに『「こどものせかい」を読む際の意識変化はあった』と回答されていました。



アンケート結果

【園内で保育者が子どもに読んだ反応を読んで】（図 4）

- ・ ポイントや年齢に合わせた楽しみ方がためになった。
- ・ 玄関掲示が子どもの興味をひき、親子で話すきっかけになっている。など

【保護者会で聞く側を経験して】

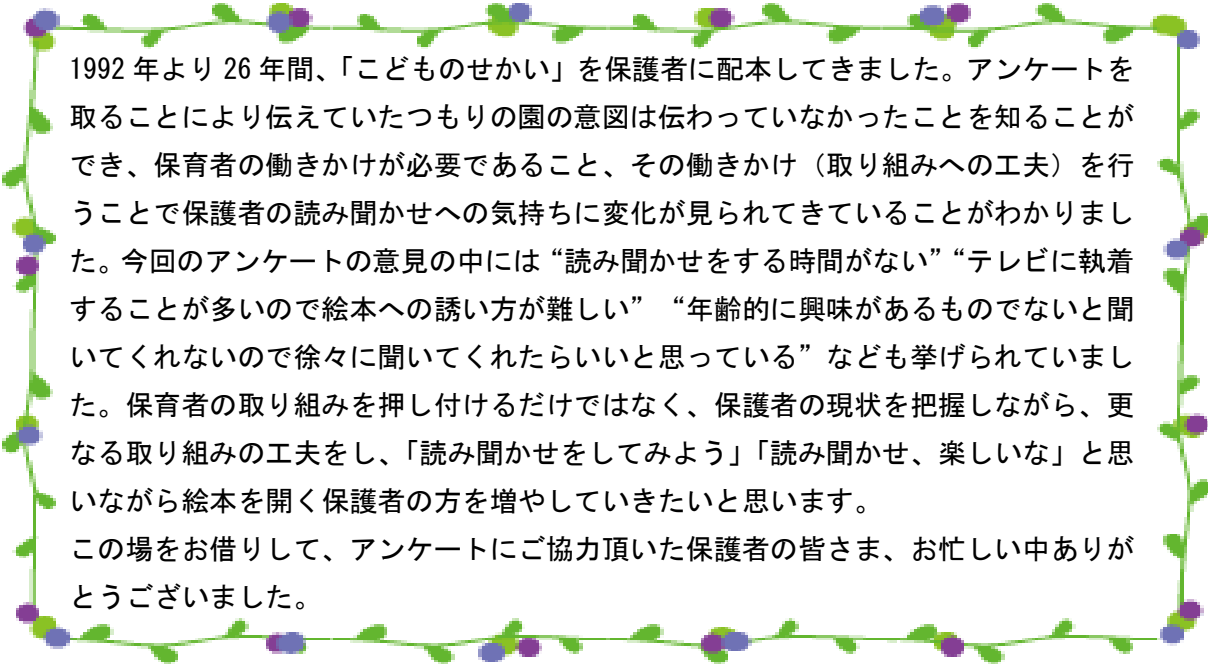
- ・ 優しくゆっくり読もうと思った。
- ・ 興味が湧くような読み方をしていると思いました。など

【保育参加で読む側を経験して】

- ・ 目を輝かせて近寄ってくれ、嬉しかった。読み聞かせが魅力あるものだと感じた。
- ・ 大げさに読まなくてもいいんだと思いました。など

【職員の感想+気づきを読んで】（図 5）

- ・ どんな点を意識すればより楽しめるか参考になる。
- ・ 読むきっかけになっている。
- ・ 絵を見てあまり面白そうじゃないと思っても玄関掲示板を見て読んでみようかなと思うことがある。など



1992 年より 26 年間、「こどものせかい」を保護者に配本してきました。アンケートを取るにより伝えていたつもりの園の意図は伝わっていなかったことを知ることができ、保育者の働きかけが必要であること、その働きかけ（取り組みへの工夫）を行うことで保護者の読み聞かせへの気持ちに変化が見られてきていることがわかりました。今回のアンケートの意見の中には“読み聞かせをする時間がない”“テレビに執着することが多いので絵本への誘い方が難しい”“年齢的に興味があるものでないと聞いてくれないので徐々に聞いてくれたらいいと思っている”なども挙げられていました。保育者の取り組みを押し付けるだけではなく、保護者の現状を把握しながら、更なる取り組みの工夫をし、「読み聞かせをしてみよう」「読み聞かせ、楽しいな」と思いながら絵本を開く保護者の方を増やしていきたいと思います。

この場をお借りして、アンケートにご協力頂いた保護者の皆さま、お忙しい中ありがとうございました。

～愛星保育園での読み聞かせの様子～

みんなも
おいも、たべる？



はい、どうぞ



おいしい～

読み聞かせをしていると自然とやりとりが生まれます。「これ、なあに？」「たべてみよっか」「おいしいね」と発語が促されるだけでなく、同じ絵本を通して共感を感じられるようにしています。



文字を読みながらも絵に注目すると子ども達から疑問の声が上がったり、見て感じたことを話す声が聞かれます。友達の感じ方は他の子の良い刺激になり、「〇〇ちゃんはこんな風にみえるのか」と保育者はその子を知るきっかけにもなります。

子どもの中には鳥が“滑っているみたい”と感じた子がいました。子どもの率直な感じる心を大切にしたいですね。



同じ人が描いた絵本、例えば福音館書店の『はじめてのおつかい』の主人公が『いもうとのにゅういん』の1場面に出きます。作者のちょっとした遊び心は他のシリーズものにも溢れています。子ども達がそれに気が付いた時、保育者も一緒に見つけた時、その嬉しさと物語を読むだけでない楽しさを絵本に感じます。

みなさんも
探してみよう！

“誰かに読んでもらおう”と文章ではなく絵に注目できます。絵は一人一人感じ方が違ってよいと思います。保育者は文章を読むだけに集中せず、絵を通して子ども達とのやりとりを大切にしながら読むように心がけています。



保育者と一対一で読み聞かせを行うこともありますが、友達がいる保育園だからこそ、友達と一緒に絵本を見ることでやりとりが育まれたり、幼児クラスになると同じ絵本を仲間とみることで一人一人感じ方が違うことを知る機会にもなっています。
保育園でどんな時にどのように絵本を読んでいるのかをご紹介します。



絵本の読み聞かせを積み重ねてきたことで想像する力がついてきた年長児は、寝る前に「エルマーのぼうけん」などの長編の物語の本を毎日少しずつ読み聞かせしています。
保育者の読む声を聞きながら、想像をし、明日の内容に期待を持ちながら眠りについています。



やってみよう！



絵本の内容だけでなく、「この絵は何を使って描いているのかな？」「どうやったら描ける？」と子ども達の「やってみよう」という意欲をかきたてる導入としても活用することがあります。

夕方、6時前後に帰る子ども達が多い毎日。その時間は少し落ち着いて家路に着くことが出来るように、保育者が紙芝居や絵本を読んで、保護者の帰りを待ちます。



至光社ってどんな会社？

～『こどものせかい』が生まれたときのお話～

有限会社 至光社社長 武市晴樹氏より

至光社は、日本が第2次世界大戦後の技術革新で急激な経済成長の中にあった頃に誕生しました。知識や効率といった経済中心の教育体制とは真逆の方向に編集方針を転換した児童誌の出版を起源とし、また、子どもも大人も共に言葉や論理を超えて共感することのできる「感じる絵本」を目指して「0歳から100歳までのすべての子どもたちへ」という編集テーマを掲げる、絵本の出版社です。

月刊保育絵本『こどものせかい』は、全国の保育園・幼稚園を中心に購読されていますが、この絵本は、戦後、1948年に創刊された『BABY DIGEST』という小学生を対象とした児童雑誌をルーツとしています。子どもたちが広く世界を知り、世界の子どもたちと手を取り合えるよう、平和を祈って刊行されたものでした。戦災未亡人であった現至光社社長の祖母や、現至光社社長の父とその友人たちなどのカトリック教徒を中心としたグループによる、戦後焼き出された自宅のガレージを拠点に、当初は月100～200部という少ない部数での配本でした。その後、1953年に名称を『こどものせかい』に変更し、発行元も至光社に改名となりました。当時、カトリック系の養護施設や孤児を保護していた施設の多くが幼稚園に変わっていく背景の中、そのような幼稚園を中心に配付が行われました。

『こどものせかい』の特徴は、子どもも大人も、言葉や論理を超えて共感できる「感じる絵本」です。『こどものせかい』がこのような方向性を見出したのは、前代表者の武市八十雄氏が、1960年頃、日本経済が目覚ましく復興していた中で、子どもに対する教育も効率重視となっていたことへの危機感にあります。これにより、すべてを論理的で、起承転結を明確にする分かりやすい絵本ではなく、読み手にとっては曖昧で分かりにくいとしても、読み手の感じる部分を残すことを重視する絵本となりました。このため、絵や文章ですべてを説明する代わりに、絵やイラストレーション、言葉にならないところにメッセージを詰め込んでいます。

非言語的なコミュニケーションを隠し味のような形で絵本に入れている「感じる絵本」は、読んでくれる人たちに、できるだけ多くのことを感じてほしいと考えています。それは、考えることだけでなく、感じるだけでもよいのです。言語を獲得していくと思考能力が高まっていくため、感受性や感性を育てることが難しくなってきます。このため、幼いこどもたちにたくさん感じてもらい、たくさん体感してほしいと思っています。



愛星保育園と絵本「こどものせかい」との出会い

愛星保育園元園長 山田 洋子

平成4年、愛星保育園園長に赴任して私が戸惑ったのは、「楽しい保育」ではなく、事故のないように見守る保育「管理保育」でした。「事故を起こしてはいけない」と緊張の毎日
で保育士達の表情もどことなく不安げに見えた上、保護者からも色々要望があり、現場の責任者として考えたのは、先ず保育は楽しいと体験し自信を持たせることと思い、以前勤めたカトリック保育園で馴染んだ至光社の幼児向け絵本「こどものせかい」を全職員の教材にして感性を育てることから始めようと思い立ちました。幸い至光社は園から割合近く、思いきって当時の社長武市八十雄先生を訪ねました。先生は私の話に耳を傾けて下さり言葉少なくも、丁寧に答えご指導下さいました。自信のついた私は、月刊誌「こどものせかい」を保育教材に使いたい旨その購買について当時の森田理事長に願い出ました。「購買できない子どもはどうするのだ」の一声で私と意図する提案は見事に却下され、暫らく時間が必要と感じました。

考えてみれば、戦後、貧しい人々や弱い立場の人達を支え合う活動に16才から奉仕して来た森田理事長にしてみれば『「保育も平等」でなければならない』信念を十分解かり私は全職員が「楽しい保育」を覚え感性を育てることから始めようと祈りながら時を待ちました。2週間程して思いがけなく理事長から「こどものせかい」は全家庭に無料で配布するが、十分活用するように」許可がでました。これを機に「こどものせかい」は保育士と子ども達は毎月初めには一緒に絵本を開き読んだり、歌ったり、文字に興味を持ったりしながら自分のロッカーにしまって、いつでも自由に出して見るよう工夫して、月末には家へ持ち帰って家族で見よう勧めました。

これに合わせて、職員達は、一日一回一堂に集まるよう工夫し、午睡の世話をする保育士以外は昼の休憩時間を利用して集う、午前の保育の様子、給食についての報告し自分の言葉で保育を話す等少しずつ馴染み集まりの終わりには祈りをもって集りを終えるようにしていました。

私の退職後は、熟練した保育士達も揃い、愛星らしい保育が続いている便りを聞き心から安堵しています。

今、こうして当時を振り返って見ると、私にとって、幼児向け絵本「こどものせかい」は愛星がかかげる「子ども親も職員もともに育ち合う」の原点だと思っています。



大人が読み聞かせを楽しむコツを
専門家に伺いました！！



小田原短期大学教員・絵本研究家・臨床心理士・公認心理師 赤羽尚美

『はらぺこ あおむし』の作者、エリック・カールは、「ちょっとおもちゃで、ちょっと絵本」をコンセプトに、実際に触って感性を育てる絵本を作りました。今では人気作家ですが、はじめはニューヨーク・タイムズでグラフィックデザイナーとして働いていました。コラージュという手法で作成したポスターを評価されたカールが、最初に作った絵本は、『1. 2. 3 どうぶつえんへーかずの絵本ー』。カールの勢いのある絵を気に入った作家ビル・マーチンは、カールと一緒に『くまさん くまさん なにみてるの』を出版し、これによりカールは名前が知られるようになりました。ビル・マーチンとの本づくりの経験を経て作られたのが『はらぺこ あおむし』です。今では一般化した穴のあいた仕掛けのある絵本ですが、50年前（1984年）はとてもコストがかかり出版に苦労していたところ、日本の小宮山印刷（現：小宮山印刷会社）が制作を受注し出版が実現しました。『はらぺこ あおむし』は、日本ともこのような関わりのある絵本なのです。



読み聞かせは、絵本と大人と子どもの3項関係の中で行われるものです。子どもは知らないことがたくさんあり、絵本を読むこと自体が新しいことを知る楽しみとなります。しかし、大人は文字を頼って読んでしまうため、文字の少ない絵本は発見することも少なく、自分の学びには利用されない傾向があります。絵本の読み聞かせは心理学的用語でいうと、記号（絵本）を介した「相互発達の行為」であり、大人も絵本に興味をもち、楽しさを子どもと共有することで、学び合いや育ち合いとなると言われています。実際の読み聞かせでは、絵本に出てくる子どもが初めて目や耳にするものに対し、大人は子どもが知っている言葉を想像し、その中で説明をします。子どもは既存の知識との違いを知り、絵の助けを借りながら知識を統合していく作業を行い、大人は子どもに説明することで知識の学び直しを行います。つまり、辞書的な知識が文脈にそった生きた言葉となります。「絵本を読む」とは、文字だけでなく、絵の言葉を読む（感じる・考える）ということなのです。

子どもの反応が悪かったり、大人が読み聞かせ自体に楽しみを見出せなかったりすると、読み聞かせが続かなくなってしまう。しかし、継続して読み聞かせをしていた家庭のその後を取材すると、小学校を卒業する頃になっても、感動や知識の源として本に対する深い信頼を示し、「ことば」を通して想像したり、表現したりする力のある子に育っていることもわかりました。

冒頭で紹介した『はらぺこ あおむし』の豆知識など、大人にとって絵本に興味をもてるきっかけ探しをしていただき、大人自身もさまざまな発見をすることで、子どもと楽しみを分かち合いながら、読み聞かせを続けていただければと思っています。





各クラスでの読み聞かせ



保育園でも子ども達と親しんでいる絵本の読み聞かせ。それぞれのクラスで子どもが興味を持っていることや成長発達に合わせて楽しめる物を選んでいきます。物語を通して保育者やお友達との関わりも広がっています。



ゆりぐみ(0歳児)『おべんとう』 (作:小西 英子 出版社:福音館書店)

指差しや挨拶をするとしぐさや表情で答える子どもの姿が見られるようになり、子どもが保育者の所へ「よんで」と持ってくる絵本の一冊です。色鮮やかで、リアリティーあふれる内容が気に入ったのかな？保育者も目の前にその食べ物があるかのように読み聞かせをしています。一対一で読んでいても何人かは側に来て一緒に見えています。食べ物をつまんで口に運ぶ「ごっこ？」「つもりあそび？」を楽しみ、絵本だけの言葉ではなく「おいしい！」「あちちち」など様々な言葉のやり取りをしながら絵本の読み聞かせを楽しんでいます。



ももぐみ(1歳児)『さんびきのこぶた』 (絵:山田 三郎 訳:瀬田 貞二 出版社:福音館書店)

繰り返しや模倣が楽しくなっていく1歳児にとって子ぶたとオオカミのやりとりは楽しいものです。言葉も少しずつ増えていく時期、絵本の読よみきかせだけでなく、歌や手遊びなども取り入れながら親しむと、子ども達も指を鼻にあてて子ぶたの鼻の真似っこをしたり、オオカミになりきってその掛け合いを表現する姿が見られます。普段の遊びの中でも可愛い子ぶたやオオカミになり切り歌を口ずさみながら保育者とのやりとりを楽しんでいます。



つくしぐみ(2歳児)『おおかみと7ひきのこやぎ』 (作:グリム童話 絵:フェリクス・ホフマン 訳:瀬田 貞二 出版社:福音館書店)

オオカミごっこが大好きなつくし組の子ども達。オオカミになりきってお友達や保育者を追いかけたり、反対にオオカミから逃げたり…。スリルいっぱいの遊びを毎日楽しんでいます。そのような姿から更にイメージを膨らませられたらと思い、この絵本を読み聞かせする事にしました。子ども達は物語の世界に入り込み、遊びの中で絵本の再現をする姿がみられるようになりました。これからも子ども達の世界を豊かにできるような絵本と出会う機会を作っていきたいです。



たんぼぐみ(3歳児)『やさいのパーティーおおさわぎ』 (作:さくらともこ 絵:吉村司 出版社:PHP研究所)

運動会の遊戯に“恐竜ダンス”を取り入れた時、『まいごのたまご』(著者:アレックス・ラティマー、出版社:KADOKA WA)の読み聞かせを通して、恐竜へのイメージを持ち、一人一人が表現をすることに繋がってきました。想像力が豊かに育つこの時期だからこそ、イメージが広げられるように絵本を取り入れることもあります。1月に行う発表会ではこの絵本を題材にオペレッタを行います。絵本にでてくる野菜の気持ちや表情などをやりとりしながら読み進めると、子ども達の想像力が育ってきたことを感じ、読んでいる側も楽しくなります。



すみれぐみ(4歳児)『ともだちや』シリーズ (作:内田 麟太郎 絵:降矢 なな 出版社:偕成社)

主人公のふたりは他の絵本では悪役になりがちな動物たちですが「ほんとうのともだちとは…」「どうしたらうまくいくのかな…」と友達との関係の作り方を悩んで考え、最後には笑顔になれるお話になっています。4歳児は友達との関係の中で悩んだり、考えたり、楽しさが分かってくる時期です。「友達にも考えていること、思っていることがあるんだ」「言葉にしなくちゃ、伝わらないよね」と子どもたち自身が気づき、友達という存在の大切さを知ることができたら良いなという思いを込めて読んでいます。



ひまわりぐみ(5歳児)『おまえ うまそうだな』 (作・絵:宮西 達也 出版社:ポプラ社)

今年度の年長児は年間を通してこの絵本を保育に取り入れています。家族や友達への思いやり、優しさがたくさん詰まっていて、子どもたちの心に響く絵本です。あばれんぼうのティラノサウルスが他の恐竜との関わりによって心に変化が生まれていきます。他にもたくさんシリーズがあり、感動や喜び、安心、時には悲しみや不安など様々な気持ちを大人も経験することができます。

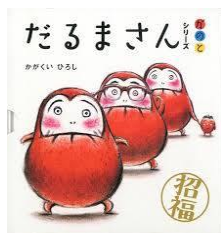
愛星保育園の保護者に伺いました。

親子で読む大好きな絵本



お子さんが好きな絵本について保護者の方に伺いました。
是非ご家庭で絵本を選ぶ時の参考にしてみてください。

★0歳児の好きな絵本★



著者/編集：
かがくい ひろし
出版社：
ブロンズ新社

『だるまさんシリーズ』

- ・擬音語を真似するのが楽しいようです。絵もわかりやすいので、ずっとけたりぎゅーっと抱っこをしてきたり、親子で楽しめる所も大好きな理由です。
- ・口真似もしやすい言葉で構成されていて、いっしょに楽しみながら聞ける絵本なので、娘のお気に入りです。

★1歳児の好きな絵本★



作：蔵富 千鶴子
絵：柿本 幸造
出版社：至光社

『うーうーかんかん どんくまさん』

消防隊が出動するシーンでは消防車に乗りそびれたどんくまさんを見て「乗れるかな？乗れるかな？」と心配し次のページで無事のっているどんくまさんを見て「乗ったー！！」と叫ぶのが我が子のおきまりのパターンです。



作：エリックカール
訳：もり ひさし
出版社：偕成社

『はらぺこあおむし』

一日数回「あおむし」と言います。保育園帰りに月を見ると「おつきさまとあおむし」と絵本の中のシーンを思い出すようです。お腹が痛くなるページでは、「あおむし えーんえーん」とあおむしの気持ちを表現しながら絵本を楽しんでいます。



作：林 明子
版社：福音館書店

『おつきさま こんばんは』

月が雲を隠してしまうシーンで、猫が抗議するシーンで怒った口調で読み上げたのがツボに入ったようで、真っ先に次のシーンを暗唱するようになりました。最後のシーンも好きで、親子を指さして「僕、お母さん」と言っています。

★2歳児の好きな絵本★



作・絵：
フィービ・ウォージントン/
セルビ・ウォージントン
訳：間崎 ルリ子
出版社：福音館書店

『パン屋のくまさん』

お人形のクマがパン屋として仕事をする一日が描かれています。文は分かりやすく絵も温かみがあります。人形・ままごと遊びが大好きな歳の子がぐっと引き込まれる一冊です。

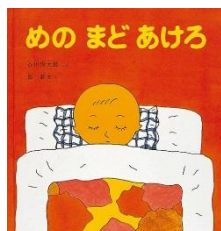
さまざまなシリーズがあり、程良くディティールにこだわっているところが、子どもが等身大で楽しめるポイントではないかと思います。



作：のぶみ
出版社：
サンマーク出版

『このママにきーめた！』

基本的に赤ちゃんが出てくる話が好きます。お腹にいる赤ちゃんが、お母さんを「エイヤー」と蹴ってお話をする事が面白いようで、母子で「エイヤー」と蹴りながら読んでいます。絵本を読んで赤ちゃんと同じように動くのが楽しくて好きみたいです。



作：谷川 俊太郎
絵：長 新太
出版社：福音館書店

『めの まど あけろ』

言葉のリズムが良い所が大人も読んでいて楽しいです。子どももいくつかフレーズを覚えていて、一緒に声をそろえて読んでいます。



作：間所 ひさこ
絵：黒井 健
出版社：
ひさかたチャイルド

『ゆきのひのころわん』

ころわんとちょろわんというかわい犬が出てきて、2匹がぶつかっている所がなぜか気に入っています。

★3歳児の好きな絵本★



作・絵：久下 エミ子
出版社：チャイルド本社

『ぼく、おにいちゃん』
祖母からもらい、自分たちが出来たお話に替えて読んでいます。特に祖母がくる度に「読んで」と何度も頼む事が多く、絵本に出てくる狸を見る度に目が垂れている顔を見て「泣いている」と言っています。



作：岩神 愛
出版社：岩崎書店

『おかしになりたいピーまん』
「ピーまんきらい」とゆずる君にいわれて、キャンディーアイスやチョコレートになってみるピーまん。お菓子里に混ざって隠れているピーまんを探すのが楽しそうです。「ここ！」と笑いながらピーまんを指さしています。



作・絵：
せな けいこ
出版社：福音館書店

『きれいな はこ』
「けんかするこはだれだ」とおばけが登場するところが好きです。必ず「おばけだー！」「きたー！」と声をあげ、待っていましたといわんばかりに喜びます。せなけいこさんの温かみのある絵とおなじみのおばけが大好きなのだと思います。



作：たむら しげる
出版社：福音館書店

『のってみたいな』
乗り物が好きなのと、乗ってみたいなという素直な子どもの気持ちを感じています。ママはどれに乗ってみたい？や僕はこれに乗ってみたい等。乗ったらちょっと疲れそうと言ったり、お菓子の国が出てくると母子一緒になり美味しそうと言って盛り上がります。



作：
さいとう しのぶ
出版社：リープル

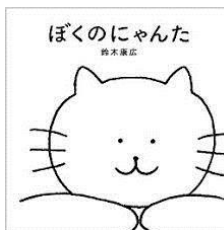
『しりとりしましょ！
たべものあいうえお』
美味しそうな食べ物が次々と登場し、しりとりになる絵本です。まだ字が読めない娘でも「読める」一冊です。どこから読んでも楽しいので時間があまりなくても大丈夫なのです。食べ物たちに色々個性があって面白いです。

★4歳児の好きな絵本★



作：コンドウ アキ
出版社：小学館

『おふとんさんとハリーちゃん』
・食べ物の絵がたくさんでてくる場所
・ハリーちゃんが少しワガママなところ



作：鈴木 康広
出版社：
ブロンズ新社

『ぼくのにゃんた』
猫がいろいろなものに変身しているというお話で、「にゃがぐつ」（ながぐつ）「にゃわー」（シャワー）など、だじやれのような言葉遣いと主人公の男の子の猫の愛情が感じられるところが好きです。

★5歳児の好きな絵本★



文：ねじめ 正一
絵：降矢 なな
出版社：福音館書店

『ずんずんばたばた おるすばん』
たくさんの動物が出てきて一緒に留守番をしてくれます。ワニが体操しているページでは必ず真似をして同じポーズを取ってくれて母もほんわかしています。

保護者の皆さま、アンケートご協力頂き、ありがとうございました。
身近な存在である大好きな親（人）の声で読んでもらう時間は、子ども達にとって特別な時間です。大人にとっても子どもとゆったりと過ごせる時間ではないでしょうか。
園内のエレベーター脇の交換文庫に今回挙げて頂いた絵本を用意しました。まだ読んだことのない絵本がありましたら是非手に取って読みきかせを楽しんで頂ければと思います。





聞かせ屋。けいたろう おすすめ絵本

○プロフィール○

夜の路上で、大人に絵本を読み始めた、聞かせ屋。
親子読み聞かせ、絵本講座、保育者研修会で全国を駆け巡る。

絵本の文章、翻訳も手がける。元保育士。一児の父。

作品に「どうぶつしんちょうそくてい」「おっぱいごりら」(アリス館)

「まいごのたまご」(角川書店) など。

ホームページ <http://kikaseya.jp>



○おすすめ絵本○

◎ 0歳～2歳クラスにぴったり

《だあれだだれだ?》文・うしろよしあき 絵・長谷川義史 出版 ポプラ社

「だあれだ?」と質問されて、「あむあむ」と好物を食べる。

とてもシンプルで、初めての絵本にぴったり。

ボードブック(厚紙)なので、めくっても、あむあむ噛んでもオッケーです。



《こちょこちょさん》文・おーなり由子 絵・はた こうしろう 出版 講談社
ご夫妻が作った、親子遊びの絵本。

「こちょこちょこちょ」こんなシンプルな遊びで、

こんなに笑い合えるなんて、知りませんでした。



《どんないろがすき?》作・100%ORANGE 出版 フレーベル館
知っていますか?歌絵本。

歌がそのまま絵本になっています。色がいっぱいウキウキします。

歌好きな子どもにとっては、絵本好きへの入口です。年少～年長にも◎



◎ 年少～年長にピッタリ!

《ぼくひこうき》作・ひがしちから 出版ゴ布林書房

僕が作った紙飛行機が、どこまでも飛んで行く。

ただそれだけで、魅力的。

絵本で何かを教えたいのではなく、絵本に共感出来たら嬉しいのです。



《まいごのたまご》

作・アレックスラティマー 訳・聞かせ屋。けいたろう 出版 KADOKAWA
恐竜達のドキドキ親探し。

外国産の絵本だけあって、色が豊かな世界です。

恐竜好きの子ども達にと、僕がリズム良く翻訳しました。



絵本の読み聞かせボランティア

「ことばつむぎ」のみなさんにインタビュー！！

4年前から4、5歳児を対象に月に一度「ことばつむぎ」のみなさんに、絵本の読み聞かせをして頂いています。

1、グループ“ことばつむぎ”の由来、名前の意味、活動内容などを教えてください。

- 大人も子どもも年齢を越えて、絵本を介して言葉を紡いでいきたいという思いがあります。
- 明治学院のCC（チャレンジカレッジ）からグループを結成しました。
- キッズサポートセンターや高輪子ども中高生プラザを含めると、活動自体は10年近くになります。

2、絵本を選ぶときのポイントを教えてください

- 自分で読みたい本と読み聞かせによい本は違うということを意識しています。
- PCやゲームでは原色が多いため、淡く優しい色使いのものを選んでいます。
- 事前にそれぞれが候補を出し、その中から選んでいます。何冊か読む場合はすべて違う世界のものにし、季節も大切にしています。

3、絵本を読むときに気をつけていることはどのようなことですか？

- 「抑揚を付けない」という仕法もありますが、絵本を読むことは平面の世界を立体にすることと考えているため、子どもたちが立体的な世界を感じられるよう、生き生きと読むようにしたり、音や手遊びを入れるようにしています。
- 絵本の文は考え抜かれているものだから、子どもの反応に引きずられたり、子どもの理解を促すような補足として、絵本の文に書いていないことまで言葉で伝えようとしないう心がけています。

4、絵本の読み聞かせをすることで子どもたちに期待すること

- 本をめくるときの子どもたちの表情がとても期待していることがわかります。
本をめくるということは、次の世界に行くこと。絵本をめくる行為は想像力を掻き立てます。
絵本をめくる楽しさを知ってほしいです。
- 読み聞かせの中で、一つ心に残るものがあってほしいと思います。だから、子どもたちが最後に書く絵がとても楽しみ。意外なものが印象に残っていることがわかって興味深いです。

5、愛星保育園の子どもたちの印象はいかがですか？

- 愛星の子はとても生き生きしているのが印象的。理解度も高くて、面白いときは笑うし、わからないところは、わからないと言え、気持ちをきちんと表現する事ができ、活があります。

保育園にも多くの絵本がありますが、子ども達が初めて触れるものが多く、毎回楽しみにしています。今回お話を伺い、メンバーの皆様のしっかりとしたねらい、温かな思いを改めて感じました。今後も絵本の読み聞かせの時間を子ども達と楽しみにしております！！

